しゅりじょう　りゅうきゅうおうこく　れきし

首里城と琉球王国の歴史

いっぱんざいだんほうじんおきなわちゅらしまざいだん　しゅりじょうこうえん

一般財団法人沖縄美ら島財団　首里城公園

首里城と琉球王国の歴史

今から140年ほど前、あなたのひいひいおじいさん・ひいひいおばあさんの時代まで、沖縄には王様がいて、今の沖縄県をずっと治めていました。

その国の名前は、琉球王国。首里城には、王様が住んでいました。琉球の人々は、お城のことを「グスク」と呼んでいました。

はくたくおじぃ

りっぱな王様の時代に、現れるという伝説の動物。
琉球王国の居心地がよいので、数百年くらい居座り続けている。
なんでも知っている物知りおじぃである。

しゅれいもん

守礼門

首里城公園で最初に目にするこの門は、「守礼門」といいます。

16世紀の尚清王の時代に建てられました。牌楼形式という中国スタイルの門で、左右のバランスがとれた美しい門として、昔から親しまれてきました。戦争によって破壊されてしまいましたが、1958年に復元されました。

「守禮之邦」と文字が書かれていますが、「琉球は礼儀を大事にする国です」という意味が込められています。

園比屋武御嶽石門

こちらは石でできた門ですが、人が出入りをする門ではありません。

王様が外出する際その道中無事に行って帰ってこれますように、とお祈りをした場所です。

沖縄戦で一部が破壊されてしまいましたが、1519年に建てられたところを今も目にすることができます。

正殿（せいでん）

大きな真っ赤な建物は、首里城正殿（しゅりじょうせいでん）です。

首里城（しゅりじょう）はこれまでに４回、火災や争い等により全焼（ぜんしょう）しています。なかでも1945年の沖縄戦（おきなわせん）によって、大部分が壊されてしまいました。今ある首里城正殿（しゅりじょうせいでん）は、1992年に復元（ふくげん）されています。

首里城正殿（しゅりじょうせいでん）は、国の大事（だいじ）なことを決めたり、さまざまな儀式（ぎしき）を行う場所（ばしょ）です。また国王やその家族が暮らす住居（じゅうきょ）でもありました。

基壇

首里城正殿は琉球で一番大きな、木でつくられた建物です。屋根が二つあり、地面に直接建物が建てられているのではなく、基壇と呼ばれるものの上に建物があります。中国にある紫禁城・大和殿や韓国にある景福宮・勤政殿も基壇の上に建物があり、屋根も二つ重なっています。

首里城正殿には中央に日本の建物の影響を受けた唐破風があり、その屋根は美しい弓なりのカーブを描いています。

また、日本の唐破風は正面が弓なりだと、屋根の後ろまでずっと同じ弓なりのカーブの屋根を作っています。しかし、首里城の後ろの見えない部分は、普通の三角屋根となっています。

北殿（ほくでん）

北殿は、お役人さんたちがたくさん働いていた場所です。また中国から王様を任命するための使者、冊封使のために宴会を行っていましたが、この北殿に面して御庭側に舞台を設置し、組踊が上演されました。

南殿・番所（なんでん・ばんどころ）

南殿・番所は、ほかの建物が赤く塗られているのに、壁は木のままの状態です。はっきりとした理由はわかっていませんが、日本風の儀式を行う場所であったため、日本風に作られたのではないかと考えられています。

番所では、正殿を訪れる人や王様への取次ぎを行っていました。

首里城正殿を境に西側は男性中心の「表」の世界であるのに対し、東側一帯は「御内原」とよばれ、国王やその親族の私的空間となっていました。

御内原では、100人ほどの女の人たちが住み込みで働いていました。国王の身の回りや王妃・王府人の世話をしていました。御内原で暮らす女性は、身分に関わらず織物を作っていたそうです。

世誇殿は、国王が死去したとき、次の王様になる王子が国王になる儀式を行った場所です。しかしながら、どのような儀式を行っていたかはわかっていません。通常は、未婚の王女の住まいでした。